

前例ない普通工業系統合

押し寄せる波

江津・江津工高の再編

Ⓜ

かつて工都と呼ばれた江津市で、江津工業高校（江津市江津町）は長年、地場や誘致企業にもつくりの人材を送り出してきた。

需給ギャップ拡大

江津市松川町の江津地域拠点工業団地に主力工場を置く、金型製造のトップ金属工業（本社・大阪市）は、江津工場の社員61人のうち、島根職業能力開発短期大学校（ポリテクカレッジ島根、江津市二宮町）進学者を含め江津工高出身者が3分の1の20人になる。

江津工高は2014年度に全校生徒数が251人、3年の卒業生は89人いた。16年度の学科再編で2学級制となり、22年度は全校で141人、卒業生は51人まで減った。

これに対し、同校への島根県内からの求人数は14年度の119人から増加を続ける。1994年の操業以来、年間数人を採用してきたが近年は求人を出しても応募は芳しくない。今春の採用がなかった同社に限らず、市内の企業の多くが同様に

専門性や個性薄まる懸念

1994年の操業以来、年間数人を採用してきたが近年は求人を出しても応募は芳しくない。今春の採用がなかった同社に限らず、市内の企業の多くが同様に

け、22年度は3倍超の380人となった。卒業生に占める就職者の割合は直近の5年平均で77・9%と高く、県内就職率

は80%超の年度もあり、上昇傾向にある。それでも生徒の絶対数が減り、需給ギャップは広がるばかりだ。

統合家について「工業とい性か減り、魅力・活力と

統合家について「工業とい性か減り、魅力・活力と



江津工業高校を卒業後にトップ金属工業に入社し、江津工場で金型製造に当たる若手社員（右）＝江津市松川町

すくなるかどうかはまた別問題」と言う。

江津市内の中学生の一定数が市外へ進学する中、両校は引き留めへ個性の確立に腐心。その個性の打ち消し合いに対する懸念だ。

島根県教育委員会が示した統合家では、工業系学科は2学級で機械、ロボット制御、建築、電気系の4コースを想定し、現在の江津工高とほぼ変わりがない。

江津高は生徒が地元イベント運営を担うなど地域密着を進め、江津工高も生徒が専門技術を生かし市内の施設改修や企業の記念品制作に取り組みなど、異なる手法で地域と連携してきた。

定員割れが続くのは、高卒就職の希望者減や中学生年代のものづくりへの関心低下が背景にあるとされる。

統合家へは、高卒就職の希望者減や中学生年代のものづくりへの関心低下が背景にあるとされる。

も生徒確保はままならない。それどころか、普通校との統合で工業系の生徒が進学希望に流れる可能性もある。

統合家へは、高卒就職の希望者減や中学生年代のものづくりへの関心低下が背景にあるとされる。

異なる手法で連携

統合家へは、高卒就職の希望者減や中学生年代のものづくりへの関心低下が背景にあるとされる。

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

統合家への懸念はまだある。江津市が15年に設置した県立高校あり方検討会は報告書で、江津高（江津市

生徒減少で獲得競争激化

押し寄せる波

Ⓣ

「今回の江津の統合案が出される前から危機感を持っていて」。浜田水産高校（浜田市瀬戸ヶ島町）の白井明校長（58）は険しい表情で語った。

定員は江津高校（江津市都野津町）、江津工業高校（同市江津町）と同じ学年2学級80人で、本年度の入学生は31人とことま

った。定員充足率は5年平均で53・8％。江津高の77・5％、江津工高の60％より低い。学校の魅力発信を強化しようとする今春にインスタグラムを開始し、「市内外での生徒募集と在校生の教育充実に力を入れていくしかない」とする。

浜田市内には浜田、浜田商、浜田水産の県立3高校

多い越境進学者

島根県教育委員会は今回、推計値で31年度の中学校卒業生数が江津市の22・2％減に対し、浜田市は7・8％減にとどまることか

ら、再編は江津優先で検討すると説明する。

ただ浜田、江津両市は双方で、市境を越えた進学者

県全体で在り方見直し必要

に進学した20人より多い。江津高も市外から入学者を増やし、同校の田村康雄校長（58）は「市内の子どもの数だけを根拠にした統合は理解が得られにくいのではないかと話す。」

地域事情も考慮を

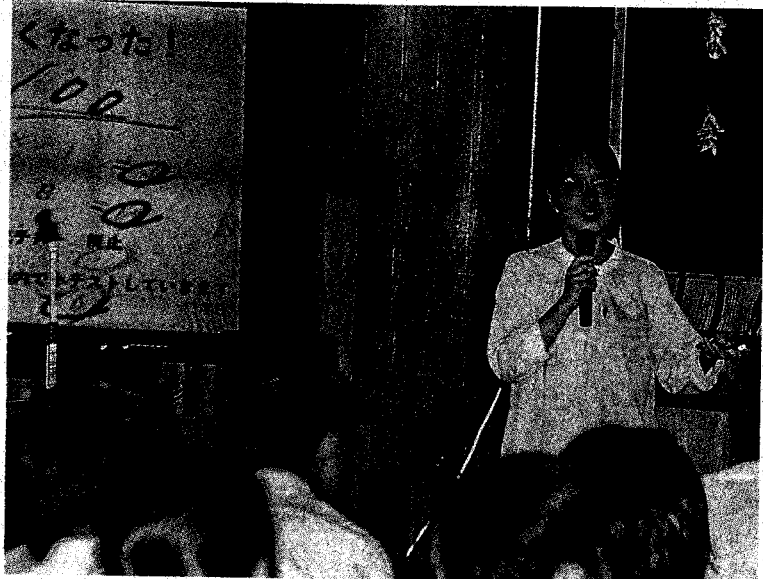
両市に限らず、市境を越えた進学は今の時代珍しくなくなつた。見方を変えると、私立を含め各高校は減る絶対数を取り合うように、生徒確保にしのぎを削る。

6月28、29の両日、浜田市内では生徒数最多の浜田第一中学校で進路説明会があった。県西部を中心に高校や専門学校など15校が参加した。体育館に3年生約120人が集まり、オンライン配信で保護者も聞く。学校紹介というより、選ん

でもらうためのアピールの場として各校担当者が説明に熱を入れた。参加校の一つで私立の明誠高校（益田市三宅町）は浜田、江津に各1便のスクールバスを走らせ、約60人が利用する。岸卓臣教頭（49）は「一時は100人いたが、地元の囲い込みが年々きつくなっている」と激化する競争環境を明かす。

本年度の県内公立高校一般入試の競争率（全日制、志願変更後）は0・92倍で、県西部（13校）に限ると0・80倍まで下がる。こうした状況では生徒が公立の入試に失敗して併願の私立に流れることもない。岸教頭は「松江や出雲とは事情が違う。定員は意味をなさない」と訴える。

少子高齢化で高校入学者は今後も減り続ける中で、望ましい教育環境を将来にわたりに確保していくのか。地域の事情にのみならず、県全体で地域にそれぞれある高校の存在意義を問い、在り方を見直す議論が避けて通れない。



中学生向けの進路説明会で自校の魅力を紹介する高校の担当者—浜田市黒川町、浜田第一中学校

がもともと多い。江津市の校同士の統合も取り上げられたいという。本年度は江津浜田を含む一つのエリアと市内から浜田高校に26人が進学した。地元の江津工高

（この企画は江津支局・村上栄太郎、西部本社報道部・吉田雅史、森みずきが担当しました）

山陰総合

題字
長澤 珠代
(浜田二中3年)

江津2高校統合方針

住民から疑問、懸念

市内で県教委説明会



江津高と江津工高の統合案を説明する島根県教委の高宮正明副教育長(左から3人目)＝江津市江津町、総合市民センター

生徒数の減少を受けた島根県立の江津高校(江津市)と江津工業高校(同市江津町)の統合方針

江津高と江津工高の統合案を説明する島根県教委の高宮正明副教育長(左から3人目)＝江津市江津町、総合市民センター

業系2学級を想定。1学年100～120人規模が、学校行事や部活動の充実につながるとしている。

これに対し、参加者47人の中からは「市境を越えた高校進学は珍しくない。江津市内の中学生数だけでは根拠になりにくいのではないか」「江津高校の23年度入学者は前年度に比べて増えている」といった疑問の声が出た。「統合される学校に進もうという生徒は減るんじゃないか」と懸念する声もあった。

高宮副教育長は「地元からの要望を丁寧に聞き取っていきたい」と答えた。

県教委は今後、工業系学科のコース内容を検討するため、市内と近隣市町の商工団体に聞き取りを行う。8月9日には有識者でつくる県総合教育審議会に統合案を諮問し、年内に答申を受けて方針決定するという。

(村上栄太郎)

地

定員割れ常態化に危機感

押し寄せる波

江津・江津工高の再編

上

生徒数が減少する島根県立の江津高校（江津市都野津町）と江津工業高校（同市江津町）について、県教育委員会は2028年度をめどに両校を統合する方針案を示した。両校は定員割れが常態化する中、将来的に統廃合される危機感を強め、魅力化に取り組んできた経緯がある。厳しい現実に向面する両校と、県教委の突然の方針に揺れる地元の姿を追う。

（取材班）

江津市内にある中学校4校、津工高20人（11・1%）私立の卒業生数は9年後、今立石見智翠館高37人（20・より22・2%）（40人）減り6%▽市外・その他78人140人になる。県教育（43・3%）だった。委員会は統合案の根拠に生徒数の厳しい見通しを示し、010年3月卒と比較する。2013年3月卒の218人から計算すると、20年で40人2学級分がおよそ減ることになる。

さらに県教委が指摘したのは地元から両校へ進学する生徒の割合の低さだ。本年度の進学先と学校別の進捗、江津高は3・2%減、学者数、比率を見ると、江津工高は3・9%減で、津高45人（25・0%）▽江津地元中学生在が離れている実

地域との魅力化向上 途上

態が分かる。

市外からの入学増

江津高、江津工高の再編話は急に浮上したわけではない。両校の定員割れが続



NPO法人てごねっと石見の藤田貴子理事長（中央）に相談しながら活動内容を話し合う地域活性部の部員＝江津市都野津町、江津高校

2023年度生徒数 江津高は定員（普通科）が1学年80人で現在、1年66人、2年60人、3年54人。江津

スーム

工高は建築・電気・機械・ロボットの両科とも定員が1学年40人で建築・電気科は1年35人、2年16人、3年37人。機械・ロボット科は1年10人、2年24人、3年11人。

江津高は赤瓦の街並みが残る都野津町にあり、お膝元の住民団体が開く街歩きイベントの運営に生徒が参加し、地域との結びつきを深めた。21年度には学校や地域で、挑戦できることを考え実践する部活動「地域活性部」も創設した。

「時期尚早」の声も

しかし県教委が示した26年度の進学者数の推計に、市外からの生徒増の傾向は反映されなかった。直近5年間の入学データから算出した江津高の入学者は本年度より20人減の46人で内訳は市内35人、市外11人と見通した。市外は本年度の21人より半数近く少ない。

成果としてまず表れたのが市外からの入学者増だった。地域活性部は部員13人のうち、約半分の6人が市外。3学年の生徒総数180人（定員240人）で見ると、市外からの進学者は44人で24・4%を占め、英語科が閉科する前年の14%増加につなげる。厳しい中で、好循環のシナリオを展望した関係者には、やるせないが募る。

市教育委員会から委託され、江津高の魅力化事業に携わるNPO法人てごねっと石見（江津市江津町）の藤田貴子理事長（48）は言う。「あと2年待てば定員近くの新生徒数を確保できそうだった。統合方針は時期尚早ではないか」

く状況に危機感を強めた市は15年、県立高校の在り方検討会を設置。議論を経て両校は存続に向け、地域と手を携えた独自の魅力化に取り組んできた。